

安心して使える環境を整備し 学び合い、考えを深める力を育てる

岡山県 総社市立総社西小学校

子どもがやや消極的で、発表する力に課題が見られた総社市立総社西小学校。ICT機器の活用により、子どもが発表する場面が増え、従来は教師対子どもが中心だった思考のやりとりが、子ども対子どもに変化し、授業中のコミュニケーションが活性化。次第に子どもが積極的に発表する姿が見られるようになっていく。

ICT活用を通じて伸ばしたい力

- 自信を持って積極的に発表する力
- 集中力や学習意欲の向上
- 学び合い、考えを深める力
- 話をしっかり聞く力

取り組みのポイント

- 実物投影機を活用して、子どもの集中力を高め、理解を深める
- 子どもがICT機器を使って発表する場数を多く設ける
- 授業の効率化によって生まれた時間を学び合いなどの学習に充てる
- ICT支援員の力を借りて教師の指導力を高める

ICT環境

実物投影機、プロジェクター、マグネットスクリーン、ノートPC…各普通教室に1台
校内LAN(有線)…普通教室に配備
PC室に児童用PC40台、電子黒板2台を配備

背景

積極的に発表する力に課題 ICT活用で授業を改善

総社市立総社西小学校は、特産品の桃やぶどうの畑、水田に囲まれた自然豊かな地域にある。全体的に子どもは素直で落ち着いており、学習に真面目に取り組んでいるが、やや消極的であり、自信を持って発表できるようになることが課題だった。

2010年度、同校では、全普通教室に実物投影機とプロジェクターが設置された。総社市では元々、市内の公立小学校に大型テレビを設置する予算を確保していたが、授業で

S c h o o l D a t a

◎1966(昭和41)年開校。総社市西部の農村地帯に位置する。目指す児童像の1つに「伝えて聞いて進んで学ぶ子」を掲げ、協同学習の充実やICT活用によって、その実現を図っている



校長 井上克彦先生

児童数 179人 学級数 9学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒710-1201 岡山県総社市久代4386-2

TEL 0866-96-0314

URL <http://www.nishi-es.soja.ed.jp/>

公開研究会 2013年11月1日(金)(予定)

授業が活きるICT

日常的に使いやすく、活用頻度が高い実物投影機などの導入に変更した。井上克彦校長は次のように話す。

「実際、実物投影機は授業で非常に活躍しています。市の判断は正しかったと思います」

08年度にマグネットスクリーンとノートPCが各教室に配備されていたが、ICT機器を使い慣れないためか、あまり活用が進まなかったと、教務主任と研究主任を務める吉井進先生は振り返る。

「本校では20代と50代の先生が大半です。個人差はありますが、若手教師は進んで授業で活用し、ベテラン教師はあまり使わない傾向がありました。黒板とチョークの授業になじんでいた教師は、ICTの要素をどのようにプラスすればよいのか、戸惑いがあったようです」

そうした状況が一変するきっかけとなったのは、11年度に、岡山県総合教育センターの指導主事を招き、ICT機器活用に関する研修を受けたことだ。実物投影機を中心に、操作の仕方に始まり、何を映せばよいのか、どの教科や単元で使うと効果的か、指導案にどう組み込めばよいのかといった指導を受けた。具体的な活用シーンがイメージできたことで、授業でも使いやすい機器であり、子どもの理解が深まるという教育効果に対する理解が広がった。併せて、フラッシュ型教材の作成、活用の研修も行った。研修後は、積極

的に活用しようとする雰囲気が高まったという。

ICTの活用法

授業の基本的な流れは変えず めあてを達成するために使う

実物投影機を授業で使う際、最も映す頻度が多いのが教科書だ。5学年担任の広瀬淳子先生は次のように説明する。

「子どもの教科書を伏せさせて、注目させたい箇所を拡大して表示すると、子どもの意識が集中します。特に、算数では教科書に答えが載っていますので、実物投影機を使い、答えやヒントを見ずに考えさせることをよく行います。また、低学年では、視覚的な資料を提示すると、集中力が高まり、理解が深まる効果があります」

社会では、資料を映して、クラス全員で気付いたことを発表し合ったり、授業の冒頭にウォーミングアップと復習を兼ねてフラッシュ型教材を使ったりしている。子どものノートを映して発表させる学習も以前に比べて増えているという。また、体育では、ハードルを跳ぶ場面など、子どもの活動をビデオカメラで撮影し、教師のノートPCに取り込み、映像を見ながら指導するようになった。子どもは自分のフォームを見ることができ、具体的な修正点をイメージしやすい。より分かりやすく指導が出来るようになったという。



総社市立総社西小学校校長
井上克彦 いのうえ・かつひこ
「子どもは分かった時に心からうれしそうな顔をする。子どもからそうした表情を引き出せる教師を育てる」



総社市立総社西小学校
教務主任・研究主任。 「先生方との協働を通して、よりよい授業づくりを目指す」



総社市立総社西小学校
広瀬淳子 ひろせ・じゅんこ
5学年担任。「子どもに頑張る経験をさせたい。何かが出来て喜ぶ子どもの姿を見ると、こちらも元気をもらえる」

ICT活用が浸透してきた今、教師たちが留意しているのは、従来の板書とICT機器との使い分けだ。資料提示はICT機器を使い、めあてやまとめなど、子どもがノートに書く内容は板書をしている。

「授業構成を検討する際は、まずめあてを確認して授業の流れを考え、ICTを効果的に使える場面を見いだしています。ICT機器は、ほぼ毎日使っていますが、どの授業でも使うわけではありません。あくまでもめあてを達成する上で効果的と考えた時に活用しています」(広瀬先生)

導入↓1人学習↓グループ学習↓まとめという授業の流れは、従来と変わらない。その流れの中に、いかに効果的にICTを取り入れるかが課題だという。

「ICTを使うことにより、子どもが授業をより楽しいと感じ、学びが豊かになる。そうして、知識が定着し、思考が深まってくる。ことが何より大切だと考えています」（吉井先生）

ICTの活用は、これまでに培った指導力が反映されると、井上校長は言う。

「経験が豊かで指導力の高い教師ほど、ICTを効果的に活用するアイデアを豊富に生み出します。授業の大切なポイントが十分に分かっているからでしょう。逆に、指導経験が浅い教師でも、ICTを使うことによって、授業の進め方にテンポが出てきます。経験豊かな教師の持つ活用技術を継承していくために、今後、研修を行うことが必要だと考えています」

■活用促進のポイント

「ICT支援員の存在により安心して「やってみよう」」

ICTの活用を進める上で不可欠と考えているのが、教師が授業で気軽に使えることだ。ICT機器の準備の煩雑さは活用において障壁の1つとなりやすいが、同校では各教室に実物投影機などが常設してあり、機器の接続などは子どもの係活動として任せている。授業時間を削ることなく活用できるからこそ、気軽に使おうという気持ちになると言う。

「子どもに準備を任せることで、ICT機

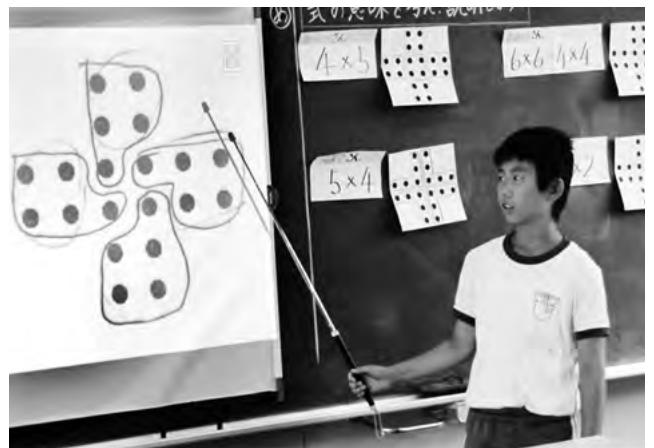


写真1 5年生の算数の授業の様子。マグネットスクリーンに映した自分の考えを指し示しながら説明する。ノートを即座に映せるため、以前より発表者の数を増やすことが出来るのも利点。子どもはいろいろな考えを知ることが出来るようになった

器は特別なものではなく、使って当たり前という空気が出ていきます。よさを実感できる機会を増やすことで、『使ってみよう』という気持ちになってもらいたいと考えています」（井上校長）

また、同校がICTを有効活用する上で欠かせない存在が、ICT支援員だ。ICT支援員は、月2回、9〜17時の間、同校を訪れて、機器の操作やトラブルに関する質問に応じたり、活用に関するアドバイスをしたりしている。ICT全般が苦手だという広瀬先生は、ICT支援員は心強い存在だと話す。

「ICT支援員に『こういう資料はありませんか』『こんな学習をしようと考えていま



写真2 5年生の算数の授業の様子。クラス全体を意識して分かりやすく発表しようとする子どもが増えている。コミュニケーションが活性化し、グループ学習も充実してきている

すが、よい教材を知りませんか』などと質問をして、助言をもらっています。何でも応えてくれるので、安心して授業で活用できるようになりました」（広瀬先生）

教室の移動などもあり、授業を行うにはハードルの高いパソコン教室も、ICT支援員のサポートがある日ならば子ども1人1台の環境での授業を安心して進められるという。また、ICT支援員は他の小学校のサポートもしているため、他校のICTの活用情報が入ってくることも大きなメリットだ。

「『このコンテンツは子どもの反応がよかったです』などと、他校の活用事例を教えられています。校内にしながら情報が集

授業が活きるICT

まってくるのは助かります」(井上校長)

■成果と今後の展望

自分の考えを示しながら 分かりやすい発表をするように

ICT活用の成果として教師が最も実感しているのは、課題だった子どもの発表する力が次第に高まっていることだ。以前は、自分の席で発表することが多かったが、今は、前に出て実物投影機で映したノートを見せながら発表することが増えた。自分のノートを指し示しながら発表するため、「皆に分かるように説明しよう」と意欲が高まるという。

「それまでは、教師対子どもが中心だった思考のやりとりが、子ども対子どもの双方向になりました。コミュニケーションが深まって、表現力をはじめとした学力が高まっていると感じます」(吉井先生)

また、岡山県教育委員会が実施した学力調査では総社市全体の学力が高いことが示されており、ICTを活用した授業の成果が1つの要因と、井上校長は捉えている。

ICTは、授業をテンポよく進めることにも大きく貢献している。黒板に貼ったり、プリントを配布したりする時間が節約され、授業の進め方がスムーズになった。そのため、調べ学習や習得のための学習の時間が、以前より長く取れるようになった。また、教師が教材をつくる作業が減り、子ども一人ひとり

に目を向ける時間が増えたというメリットもあるという。

活用が進むにつれ、いくつかの課題も出てきた。例えば、マグネットスクリーンにマーカーで書き込むことがあるが、その都度、消費しなければならず手間がかかる。予算上の課題もあるが、理想は大きな教室の後ろに座っている子どももきちんと見える通常黒板の半分ほどのサイズで、かつ鮮明に映る電子黒板が常設されることだ。

「『よい授業をしているつもりだったが、後ろの席の子どもは画面が見づらかった』というのでは、本末転倒です。しっかりと活用していくためにも、子どもの姿をしつかり見取り、教師の指導技術を高めていかななくてはなりません。そうすることが、子どもの学力向上に結び付くと考えています」(井上校長)

今後は、グループごとにタブレットPCを使用し、グループ学習を活性化させたり、机間指導で見逃してしまっていた子どもたちの考えを一齐に把握できるようにしたりしたいと考えている。それにより、これまで以上に個に応じた指導を実現すると共に、全員が発表する場を設けることがねらいだ。

「実際に使ってみればよさがわかり、自治体への提案もしやすくなります」と井上校長。「どんどん使う」ことで、効果を共有し、学校全体で推進するICT活用を今後も続けていく考えだ。

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

環境整備と情報収集が、校長の大きな役割です。実証的に使用し、学びに効果があれば、行政への説得材料にもなります。そのように、導入の筋道を立てることを大切にしています。ただ、校長1人で全てをこなすのは無理であり、ミドルリーダーの先生の力を借りて一緒に取り組んでいます。担任の先生方は「これはいい」と思えば、積極的に取り組んでくれます。そうしてもらおうまでが、私の仕事なのです。

校長 井上克彦先生

ミドルリーダーの役割

校長先生の経営方針を分かりやすく伝えることが、私の役割です。ICTの活用を進めるに当たっても、いかに抵抗なく、そして指導のプラスになるかを意識して伝えるようにしています。

また、ICT活用に限らず、私が一方的に話すのではなく、先生の「困った感」に寄り添うことで、授業づくりへの強い意欲を持続けられるように動くことを心掛けています。

教務主任・研究主任 吉井進先生